



命育む 森林

対馬の環境を考える
生物多様性 前篇

美津島町 城山を歩いて



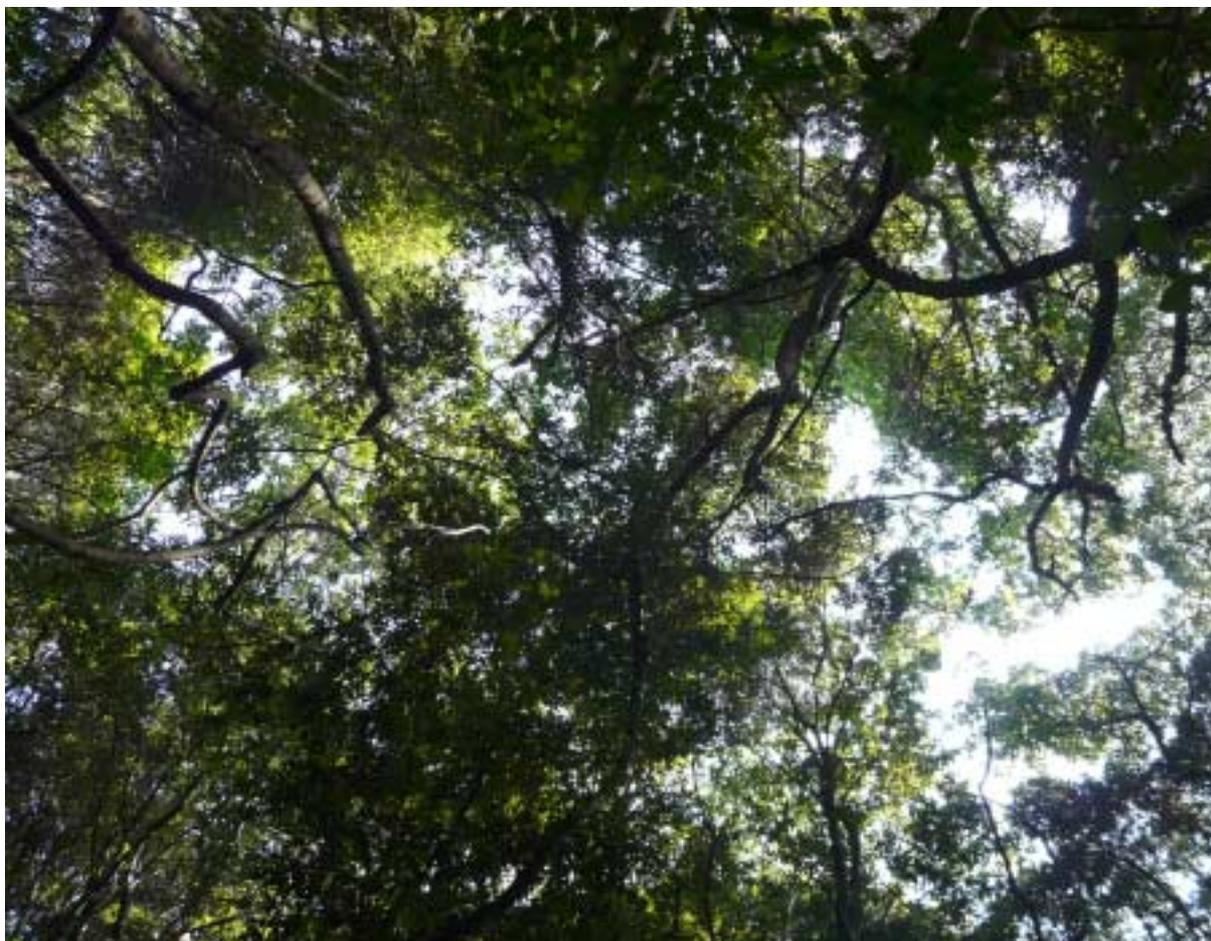
まだ暑さの残る9月に城山を訪ねた。
樹高の高い杉林を抜け、山を登って
行くと、次第に木漏れ日の気持ち良い
森に入る。

静かだが、何かに育まれているような
柔らかい空気が満ちている。

高台の視界の開けた場所から海を
臨めば、こんもりとした森を形成する
照葉樹林が海の際まで続き、穏やかな
海と優しい森が融合する。



木や草、動物や昆虫、微生物にいたるまで
多くの生きものつながりが生命の基盤を支えている。



対馬の森は、カシやシイ類を主とした常緑広葉樹林からなる暖帯林に属する。

「5月の新緑の頃、枯れ木に新芽が芽吹いても、常緑樹は遠慮して少し後から、元の緑の葉の上に柔らかい、少し灰色がかった新芽を出さずです。隙間なく埋まった時を見計らって、短期間に古葉と新葉を入れ替える。そのうちにシイの木に花が咲いて、黄色っぽく映る。緑が何重にも重なって、その時期の対馬の山はまさしく燃えるような緑になるんです」同行いただいた自然観察インストラクターの長渡稔治さんはその頃の美しさを思い浮かべ、目を細める。営林署勤務時代、対馬の山に魅せられて、終の棲家に対馬を選んだ。



「森の中が明るいでしょう。自然林は原則的に10%の隙間があるんです。光が入ることです。下草も生え、昆虫や動物なども棲んで、生命共同体が作られるんです。手入れされない暗い人工林ではその営みができない。温暖化を抑えてくれるような健全な森にするには、人が手入れをしてあげないといけないんです」対馬市の総面積のうち9割が森林で、人工林はそのう

ちの約3割。温室効果ガスの削減を求めた京都議定書は、森林による二酸化炭素の吸収量も加えられるものの、その対象は新たに造成された森林と、適切に手入れされた森林に限られている。定められた期間まであと2年。早期の森林整備が必要だ。

「森には生産者、消費者、分解者がいます。生産者は、木。葉の一枚一枚がデンプン工場で、それを虫たち消費者が食べにくる。その死骸や固い木の枝などが地上に落ちると、分解者の中でもキノコ類が大まかに、微生物やバクテリアが細かく分解するんです」木や草、動物や昆虫、微生物にいたるまで多くの生きものつながりが生命の基盤を支えている。

対馬市の新たな取り組み

(仮称)対馬市森林づくり条例
検討委員会



本市の約9割を占める森林資源の有効活用とツシマヤマネコをはじめとする多様な生物の保護・保全のルールをつくることを目的に(仮称)

対馬市森林づくり条例の検討を行っています。委員会は、公募委員・関係機関委員・学識経験者等の19名で構成され、来年の8月を目途に条例案の取りまとめを行い、市長へ提言する予定となっています。今後、市民の皆さまにも参加いただく機会を設けたいと考えております。

また、委員会は、公開により開催されています。興味のある方は是非ご参加下さい。

《第2回検討委員会》

日時 平成22年10月22日(金)

14時~16時

会場 対馬市役所 別館

内容 条例骨格について